

コロナ災禍 連帯メッセージリレー (12)

生活を支えてくれる 方々に感謝を

南マ州日伯文化連合会 酒井アケミ会長



酒井アケミ会長

皆さんこんにちは、酒井アケミ・アリエと申します。私は、山形県から南マ州に引っ越し、南マ州日伯文化連合会初の女性会長です。

当連合会は、南マ州・グロソソ州の南部中央部に位置するドウラード市に1964年に設立され、10日本人会とドウラード日本語モデル校を管轄しています。

地域で日本文化を維持するため、日本語教室、折り紙、そろばん、和太鼓、踊り、カラオケ、老人会での活動、ゲートボールや野球などのスポーツなどあらゆる年齢層を

対象とした様々な活動を行っています。

1989年に南マ州・グロソソ州に南マ州日伯文化連合会、国際的に貢献しています。

新型コロナウイルスの感染拡大により、2020年3月半ば以降、州政府に続き、市政によって決定された社会距離拡大戦略(ソーシャル・ディスタンス)の感染拡大防

止措置により、州内の全市民生活の変化を余儀なくされています。

日本人会が展開してきた数々の活動、教室、会議、イベント、大会など、中止となり、人々の日常生活に急激な変化が生

じています。

カラオケ、踊り、和太鼓の練習、ゲートボールや雑談を行うなどの小さな催しの中止の積み重ねが、皆の生活に大きな影響をもたらしたことは事実です。

友人の笑顔や抱擁はお金では買えない価値があります。家に長くいることは簡単ではありません。時には寂しく心細くなり不安感をもちます。

このような状況下でも、地方に住んでいることで、流行地域から離れてお



協会で行われていた様々な行事や活動

り、感染率が低いいため恵まれています。

幸いなことに、私たちは新型コロナウイルスと全力で向き合っており、全国で最も症例数の少ない州です。友人、親戚や家族と会うことはできませんが、一人一人、家で健康に過ごしていると思えます。他の州や国では別の言葉や言い回し、多くの身近な人が毎日亡くなっています。

この機会に、元の日常生活に戻すために努力している方々、自分の命を危険にさらしている医療機関に勤務している方々、食卓に欠かせない食材を太陽の下、暑さや寒さに耐えながら頑張っている農業関連産業に従事している方々、

この機会に、元の日常生活に戻すために努力している方々、自分の命を危険にさらしている医療機関に勤務している方々、食卓に欠かせない食材を太陽の下、暑さや寒さに耐えながら頑張っている農業関連産業に従事している方々、

中南米航空最大手が破綻

LATAM、コロナが打撃

【サンパウロ共同】中南米最大手でチリに拠点を置くLATAM(ラタム)航空グループは26日、米裁判所に連邦破産法11条(日本の民事再生法に相当)の適用を申請したと発表した。新型コロナウイルス流行による旅客減少を受け経営破綻した。業務を維持しながら再建を目指す。

チリのメディアによると、26カ国の145都市を結んでいたが、コロナ禍により4月初めから運航を95%縮小した。2019年の旅客数は過去最高の約7400万人だった。中東のカタール航空などが支援に動いているほか、チリ政府など最大手ラン航空とブラジル最大手のタム航空が合併して誕生。申請はチリで受け付けられている。

グループは12年にチリ最大手ラン航空とブラジル最大手のタム航空が合併して誕生。申請はチリで受け付けられている。



伯国では新型コロナウイルスの感染拡大が続き、緩い規制のみを採用し、ボウソノロ氏が反隔離の例とするスウェーデンは死者が急増中だ。

伯国では新型コロナウイルスの感染拡大が続き、緩い規制のみを採用し、ボウソノロ氏が反隔離の例とするスウェーデンは死者が急増中だ。

同国は一人暮らしの人が過半数で、何も言わなくてもいかに危険かを示す例がイタリアやスペインだ。両国は外出規制導入が遅れた上、若者が両親と同居する世代同居例が60%近い。専門家達は、外出を規制した国より高かった死亡率(100万人当たりの死者数)が13、20日は1日あたり6人を超え、世界一となった。同国はそれでもイタリアやスペインなどよりましだ。

だがボウソノロ氏のハイルスクの人だけ隔離し、若者は働け、との言葉が、いかに危険かを示す例がイタリアやスペインだ。両国は外出規制導入が遅れた上、若者が両親と同居する世代同居例が60%近い。専門家達は、外出を規制した国より高かった死亡率(100万人当たりの死者数)が13、20日は1日あたり6人を超え、世界一となった。同国はそれでもイタリアやスペインなどよりましだ。

だがボウソノロ氏のハイルスクの人だけ隔離し、若者は働け、との言葉が、いかに危険かを示す例がイタリアやスペインだ。両国は外出規制導入が遅れた上、若者が両親と同居する世代同居例が60%近い。専門家達は、外出を規制した国より高かった死亡率(100万人当たりの死者数)が13、20日は1日あたり6人を超え、世界一となった。同国はそれでもイタリアやスペインなどよりましだ。

樹海

伯国では新型コロナウイルスの感染拡大が続き、緩い規制のみを採用し、ボウソノロ氏が反隔離の例とするスウェーデンは死者が急増中だ。

同国は一人暮らしの人が過半数で、何も言わなくてもいかに危険かを示す例がイタリアやスペインだ。両国は外出規制導入が遅れた上、若者が両親と同居する世代同居例が60%近い。専門家達は、外出を規制した国より高かった死亡率(100万人当たりの死者数)が13、20日は1日あたり6人を超え、世界一となった。同国はそれでもイタリアやスペインなどよりましだ。

だがボウソノロ氏のハイルスクの人だけ隔離し、若者は働け、との言葉が、いかに危険かを示す例がイタリアやスペインだ。両国は外出規制導入が遅れた上、若者が両親と同居する世代同居例が60%近い。専門家達は、外出を規制した国より高かった死亡率(100万人当たりの死者数)が13、20日は1日あたり6人を超え、世界一となった。同国はそれでもイタリアやスペインなどよりましだ。

大目小目

先週、外出自粛令の下、聖市のメトロ・サウジ駅周辺を歩いていると、Graca de Deus)ではミサが行われていた。「外出自粛令で禁止されているはずだが」と思って、ガラス張りのドア越しに中の様子を覗いてみると、約100人は収容できるであろう大広間に信者が5人程いた。各信者は2メートルずつ距離をおきマスクを装着して、お祈りしている。礼拝、聞く所によると、コロナ対策をして週に2回、ミサを行っている。同教会はキリスト教の中でも新教ペンテコスタ派で有名。創立者R・R・ソアレス氏はボウソナ口大統領とも仲が良いことで知られる人物なので、もしかして特別扱い? ドリア聖州知事は27日の記者会見で、6月1日から若干の外出自粛緩和措置をとることを発表した。詳細は1面3段記事を参照。先週から今週初めの臨時休日の自粛待機率が比較的に良かったこともあり、緩和方向に舵を取ることになった。たまたま州が解除した地域でも、今後の感染の危険がなくなるわけではない。引き続き自主的な必要がありそうだ。

38市は6月15日まで、明瞭になるまでは同様に搭乗を拒否されることから、見込まれることから、同協定域内で2回の乗り継ぎが必要となる路線を避けるよう訴えている。

シエンゲン協定加盟国は以下26カ国、アイスランド、イタリア、エストニア、オーストリア、オランダ、ギリシャ、スイス、スウェーデン、スペイン、スロバキア、スロベニア、チェコ、デンマーク、ドイツ、ノルウェー、ハンガリー、フィンランド、フランス、ベルギー、ポーランド、ポルトガル、マルタ、ラトビア、リトアニア、ルクセンブルク、リヒテンシュタイン。

ブラジルに帰ったとき、子どもたちに奇妙な言葉を使った。便所をトイレと呼んだ。フランス語の toilette が英語の toilet になり、それを簡略してトイレとなったのだ。英語の service は日本語にサービスと発音した。そして、房子はもう二度と日本には帰らないといった。

子どもたちははじめ、幼年、少女期を過ごし、頭で描いた日本と現実の日本が違いくらい、モダンな習慣を自分たちの生活に取り入れることなどできなく、それが二度と故郷に帰らないという気持ちにさせたのかもしれない。そのあと、自分たちが日本の親戚を訪問する機会があり、そのとき、はじめて母の心境を理解することができたのだ。

別離のいたみを二度と味わいたくないというのが真実だった。

房子は沖繩で自分と同じ年頃で、いつしよに育った甥や姪と再会した。沖繩を去るに当り、今度こそ最後の別れとなり生涯会うことができない、お互いに年を取り、再会など望めないと感じたのだ。そのような悲しみを繰り返すことはあまりにも辛いことだった。そして、別の時期に正輝の故郷、新城を訪れたマサユキ、アキオ、ジョージも従兄弟の昇と別れるときに同じ思いをすることになった。

その後、房子は正輝が従父した「生長の家」の教義を勉強し、その布教に力を注ぐことになった。その努力がむくむく、「生長の家」の創設者、谷口雅春署名入りの教職員免許書を獲得するまでに至った。

家族は房子を中心に広がっていった。孫が増えるにつれ、房子自身も子どもたちも最初は「おばあさん」とよんでいたのだが、すぐに家族中が「ばあちゃん」とよぶようになり、現在にいたるまで、彼女の子孫はみな「ばあちゃん」とよんでいる。

息子たちのほかに24人の孫3人の曾孫を残して、房子は1996年7月3日に他界した。

傑物・下元健吉

その志、気骨、創造心、度胸、闊達

人物は底をきいた!

以上、下元健吉の生涯と事業を概観した。

それを終えた後、強烈な光を放つ、筆者の心に残ったのは、その志、気骨、創造心、度胸、闊達志である。

日系の血の継承者が、彼に学ぶものがあるとすれば、このスピリットであろう。

話は一寸それるが、30年ほど前(1989年)、当時、南米銀行の会長であった橋富士雄が「コロナでも日本でも」

人物は底をきいた! という意味の短文を、ある書物の中で書いていた。

これを讀んだ時、筆者は内心「アッ!」と思っただけで、他にもそう感じた読者が多かったのではあるまいか。



下元健吉

「その人材たちも自分の守備範囲だけを守るのが精一杯である。他を顧みる余裕はない。結果として潤いが失われた。乾いた砂漠のような社会風土が現出しつつある。加えて人間が卑小化、小粒化している。

指導者としての器量を備えた人物は底をきいて、コロナでも日本でもそうである。

この橋がかつて「傑物」と評したのが下元健吉である。1987年、コチア産組60周年の折「コチアの今日あるは、まず下元健吉という傑物が居たからだ」とある雑誌の取材にコメントしている。

下元はすでに触れたように、終戦直後、南銀の宮坂国人に鋭すぎる一言を吐いた。その頃、南銀は再建中であり、橋は若手行員の一人であった。南銀がビニエロスのコチア産組本部の傍に営業用の拠点を置き、橋が挨拶に行つた。すると下元は罵声を浴びせたという。

2回乗り継ぎフ

欧州シエンゲン協定域内

在ブラジル日本国大使館は広報を通して、ブラジルから日本に帰国する際に欧州のシエンゲン協定域内で2回の乗り継ぎが必要となる路線を避けるよう訴えている。

シエンゲン協定加盟国は以下26カ国、アイスランド、イタリア、エストニア、オーストリア、オランダ、ギリシャ、スイス、スウェーデン、スペイン、スロバキア、スロベニア、チェコ、デンマーク、ドイツ、ノルウェー、ハンガリー、フィンランド、フランス、ベルギー、ポーランド、ポルトガル、マルタ、ラトビア、リトアニア、ルクセンブルク、リヒテンシュタイン。

正輝が世を去ったとき、ネナとセーキ以外にはみな大学生が卒業していた。勉学をやめていた者もやがて学校に戻った。マサユキは経済学士となり、彼の影響を受けて、家でアキミツと呼ばれていたハキオと、ミチチと呼ばれていたシルヴィオも途中で一時働いたりしたが、大学で経済学を専攻した。ツィコとよばれていたシダも経済学に進んだ。ヨシコと呼ばれていたアメリカは法学を学んだ。

